

無自覚ドSのご主人様は、ドジっ子メイドの私を

絶対対に手放してくない！

くお暇しようとしたのに、甘々♡溺愛♡

お仕置きの末にちゃっかり囲われちゃうお話く

プロローグ

新品のメイド服はまだまだ生地が固く、少し重たい。

初めて彼に出会った日は、空は一日中雲がかかっているような生憎の天候だった。だから、余計に重たく感じたのだろう。

「ほっ……本日から、こちらでお世話になります！　しッ、島原日和と申しますっ！」

上品な調度で埋められたお部屋に、部活動初日かと言いたくなるくらい大きな私の声が響いてしまう。

緊張のせいにしたいけれど、その割には威勢が良すぎる声だ。恥ずかしくて、すぐに顔が赤くなった。

（やっ……やらかしたあ……！　から回っちゃってる……!!）

お辞儀をしたままの顔が、上げられない。重厚感たっぷり絨毯と目が合った。その赤い毛並みにも負けないくらい、私の顔は上気していることだろう。

いつも、こうだ。

頑張ろうとすればするほど、から回ってしまふ。いつもの自分らしさがしつかりと嫌になった。どうしたって、彼の顔を見ることができない。

（せっかくおばあちゃん縁で雇われたのに……！）

何の取り柄もない私が名家である神崎家に拾われたのは、亡くなったおばあちゃんのおかげだ。

ここを追い出されたら、ついに行くあてがなくなってしまう。そう思うと心底恐ろしく、おばあちゃんに会いたくてたまらない寂しさが私を襲った。

「うん、こんにちは」

なのに、そんな私の追い詰められたような気持ちを、上品さしかない声がゆつたりと撫でていったのだ。

自然と、顔が彼の方へと向いてしまう。

(……春の風)

突拍子もなくそう思ってしまうほど、優しい声だった。

「同じ年の子って聞いてるけど、君のことで間違いないかな？」

「えっ、は、はい……っ！ 多分……はい！」

「そっか。家の中に近い年齢の人間がいないから、なんだか嬉しいな」

「へっ……？」

「兄さんとも歳が離れてるし、話題が噛み合わないことも多くて。まあ、僕だって流行りに敏感なわけじゃないんだけど……その、大学

でも話に置いていかれることが増えちゃってさ。昔から大人が周りにいるからだと思うんだけど、ちよつとした悩みでね……」

「は、はあ……」

優しい声に見合う優しい表情で、思いもよらないことをつらつら言われて戸惑った。まるで「新しい友人ができた」みたいな雰囲気だ。

私は、ただの使用人なのに。

(優しい人だとは聞いてたけど……)

思っていた以上に優しい。……気がする。

想像を超えてきた事態に戸惑いながらも彼の声を聞いていると、不意に大きな手が差し伸べられた。

「えっ？ えつと……!!」

「これから、よろしくね」

おばあちゃんの手なんか可愛い大きさだったんだと思った。

広い手のひら、長い指、知らない肌。

「日和、って呼んでいいのかな？」

「……………」

どうってことない台詞かもしれない。でも、どうってことないはずなのに、今、私を固めていた緊張は一瞬でどこかへ飛んでいつてしまった。

このたった数秒間で、彼がどれほど私を安心させたか。とてもじゃないけれど、私は言葉では言い表せない。

「……はい……………」

恩を返したいのに、おばあちゃんはどうもない。

ならば、おばあちゃんが縁を繋いでくれたこの人に報いよう。

（取り柄なんて、愛嬌くらいしかないけれど）

「こちらこそ……………よろしくお願いします……………」

おずおずと彼の手を握る。改めて触れると、その大きさにギョツとした。

（男の人の手つて、こんなにおっきいんだ……！）

そして、すぐに近くにいたメイド長に「こ、こら！」と怒られもする。メイドの分際で匡哉様と握手をするなんて、という至極真つ当なお叱りを受ける私に、匡哉様は春風の如く笑っていた。

「ごめんごめん。今のは僕が悪かったね」

その美しさは、さつき握った手と、どこかけ離れている。何故だかは分からないけれど、胸の奥がきゅうつと小さくなった。



あの日から、数年。

「あッ、んんっ♡ あ……っ、ふ……んう………っ♡」

いつだってから回ってやらかしてしまう私は、椅子に座る匡哉様の太ももでずりっ♡ずりっ♡とクリトリスを擦っている。

今し方、匡哉様の朝食を片付けようとして食器を盛大に落としてしまったからだ。

「困るよ、日和。朝はメールの返信で忙しいんだから」

落としたスプーンを拾い上げながら、匡哉様はそう言った。大学を卒業してから家業を手伝う匡哉様は、若いながらに仕事で忙しい毎日を送っている。

だから次いで、こうも命令されたのだ。

「朝からお仕置きだね。でも時間がないから、自分でやってもらおう

かな。あと……指を使うのは、禁止」

「えっ……!？」

「僕の太ももに乗って、伊ってごらん」

「っ……!」

そう、これは命令なのだ。だから私に許されるのは、スカートを捲り上げ、必死に腰を前後させることだけ。

「はあ……っ♡ん♡あッ……あ♡んぐっ……♡」

匡哉様のお部屋は広い。なのに今は、彼と、彼の身の回りの世話を
する私だけしかいなかった。

だから、高い天井に私の喘ぎ声と布の擦れる音が届いてしまっている
ような気がする。腰を動かすたびに羞恥心が煽られて仕方がなかった。

「……………」

匡哉様は、私に自慰をさせながらもずっと穏やかな表情だった。それどころか、私を見てすらいない。片方の手で私の腰を抱き、空いたもう一方では仕事用のスマホを操作していた。メールの返信をしているのだろう。

（匡哉様の太もも……っ♡ 固くて……気持ちいいッ……♡）

「ん……っ♡ はあ……ッ、あっ♡ んっ♡ んんッ……♡」

筋肉に覆われた彼の太ももの固さのおかげで、私のクリトリスは、すでにぷりゅっ♡とした硬さを持つてしまっている。

その硬くなったクリトリスを潰すようにして匡哉様の太ももに押し付けると、ビリビリした快感が昇ってきてくれた。口からいやらしい声が溢れるのを、どうしても抑えることができない。

（気持ちいい、けどっ♡ あとちよつとが、足りないよおっ……♡ 恥ずかしいから……早く、イきたい♡ のに……っ♡）

「——日和？　まだイケないの？」

「ッ、あ、ごっ♡　ごめん、なさいっ……♡　んっ、ふあ……ッ♡」

「これで会議に遅刻したら、またお仕置きだけど大丈夫？　困ったな、日和のお仕置きだけで今日一日が終わっちゃうよ」

「は、はいっ……♡　申し訳ありませ、ん♡♡　もうちよつとでっ……♡　ッん、は、あっ……♡」

「じゃあ、乳首だけなら指を使うの許してあげるよ。いくときは、きちんとイクイク♡ってするんだよ？　できるよね？」

「ッは……はい……っ♡　ありがとう、ございまッ……す♡　ん、うあ……ッあ♡」

いつの間にか、「イかなきゃ」ではなく「イきたい」になってしまっていることに気づいてしまう。乳首を触っていいと許可され、きちんと喜んでしまったのだ。

（だめ……ッ♡ そうじゃなくて……命令を、されたんだから……っ♡）

不埒な考えから逃げるように、手で捲り上げていたスカートを口に咥えた。手を自由にしないと、乳首を触ることができないからだ。

「っ……っ♡」

匡哉様がスマホを眺めている傍ら、私は腰を揺らしながらもおっぱいを彼の顔の近くで晒け出した。

（あ……すごい……っ♡ 乳首、ぱんぱん♡に……なっちゃってる……っ♡）

誰にも触られていない乳首は、すでに熱を持って腫れ上がっていた。触ってもらえるのを待ち望んでいるかのようで、勝手に恥ずかしくなる。

「ッ、あ♡ ぐっ♡ んうッ……♡ ふ……、ッ♡ んぐうッ……

♡」

かりゅっ♡ かりゅっ♡ かりゅっ♡ かりゅっ♡

腫れた乳首の先を、爪の先で何度も擦る。その間もクリトリスをずりっ♡ずりっ♡と匡哉様の固い太ももに押し付け、一心不乱に腰を振った。

一緒になって襲ってくる快感に、スカートを食む唇に力が入る。

「ふうっ♡ ふうっ♡」と間拔けな喘ぎが漏れてしまうけれど、指も腰も、羞恥心を感じる隙を与えてくれなかった。

（あゝゝゝっ♡ すごい♡ すごい♡ これ♡ 気持ちいい♡
お仕置きなのに、勝手に気持ちよくなっちゃう♡ いい♡ 乳首の
先っば爪でカリカリ♡するの、イイ♡ あっ♡ あ……♡ 匡哉様
の横顔、すっごく綺麗……♡ 匡哉様の綺麗な顔見ながら、自分
で乳首弄ってクリトリスこねるなんて♡ はしたないのにつ……

♡♡ 気持ちいいよお……っ♡♡

勃起した乳首は、爪で弾かれるたびにプルンッ♡と揺れる。匡哉様の横顔を見ながら、ビンビン♡になってしまっている乳首を何度も揺らした。

すると、何かに気づいたかのように匡哉様が自身の太ももを見下す。そして呆れたようにこう言った。

「あれ、日和？ 僕のストラックスが日和のお汁でぐっしより♡になっちゃってる。……日和が早くイってくれないから。——これ、どうするの？」

「ッ……♡」

どうするのと言われても、恥ずかしながら、彼のストラックスが私の愛液で濡れてしまったのは、私が跨つてものの一分くらいだろう。

けれど、色が変わったのを見計らって、彼はそんなことを言ってく

る。意地悪だから。

「~~~~っ……♡」

けれど、そんなサディスティックな部分が分かっているながら、一段と濃くなったグレーの生地を目にすると、じゅん♡と興奮してしまう自分もいた。

（私のお汁で、匡哉様のおズボンが濃いグレーになってる……っ♡ あ♡ やだ♡ 叱られてるのに、叱られながら乳首カリカリ♡ っでするの、絶対止められない♡♡ 気持ちいいッ……♡♡♡）

「ほ、ほへんな、はいっ……ん♡ ん、んっ……ん♡」

「なんて言ってるか分からないよ」

スカートを噛んでいるから上手く発音ができない私に、匡哉様はニコツと笑った。

そして、スラリと長い指を私の胸へと近づける。

「もしかして、わざとやってる？　もっとお仕置きされたいのかな？」

「へ、あつ……………あぁッ♡」

きゅうッ♡

私の指を軽く払いのけた匡哉様は、私よりも大きい指の腹で勃起した乳首を強くつまんだ。

自分ではない体温と圧の強さに、濁った声が出てしまう。すると、口に咥えていたスカートがはらりと落ちて、私と彼の太ももをサッと隠した。

隠されていても、グッチョリ♡と濡れてひつつく私たちの皮膚は、そこに在る。それを「いやらしい」と思った。

「日和は、乳首を触られるのが好きだもんね」

「ひうッ♡　あッ♡　匡哉、様……………♡　乳首そんなに……………ッあ……………」

つまん、じゃ……だ、えっ……♡ あ、あッ♡」

「嘘つかないよ。だめじゃないでしょ？」

「あ、ひッ……♡ だ、だってえ……っ♡」

「ほら、乳首ぐにぐに♡ってしててあげるから、可愛くイクイク♡するんだよ、日和。スラックスの替えも用意してもらわないと」

「は、はいっ♡ ありがとう、ございますっ♡ ツ、あ♡ 匡哉……

さま♡ あ♡ あッ♡ 乳首、気持ちいい♡ ですうっ♡ も、もっ

と♡ っ♡ もっと潰して♡ くださ、いいっ♡ おあっ♡ あっ、

あっ♡ クる♡ アクメ♡ キますっ♡♡ おッ、あっ♡ イく♡

イク♡ イく♡ イくっ♡ 匡哉様♡ 匡哉様あっ♡♡」

匡哉様は、見目も麗しければ性格もとびきり優しいお方である。

穏やかで、思慮深く、使用人に対して横柄な態度を取ることもない。

百人の女性に理想の男性を思い浮かべさせ、その平均を取るとした
最終的に匡哉様になるだろう。

なのに、彼はどうしてか「こういうとき」だけは意地悪だ。

「はは、エッチな顔だね、日和。可愛いよ。見ててあげるからね」

「くくくや、あっ♡ み、見ない、で……ッあ♡ 見ない、くくく
でっ……あ、あッ、あくくくっ♡♡」

「どうして？ それが日和の仕事でしょ？」

優しい瞳が私を見つめる。背中を、ぞわりとした何かが走って
いく。

（あ♡ だめ♡ 見られてる♡ 見られてる♡ 匡哉様に♡ 大好き
な匡哉様に、オナニーでアクメするところ♡ 見られてる♡ やだ
♡ やだなのに♡♡ アクメ♡ クる♡ クる♡♡ 匡哉様に乳首虐
められながらお膝の上でクリオナして♡♡ アクメ、キちゃ

うう……っ♡♡)

「——日和は、僕の可愛い『専属メイド』なんだからね」

匡哉様の声を聞きながら、私をお腹に溜まった快感を絶頂に変えた。苦悶と恍惚が混じったふしだらな表情を見つめられたとて、隠すわけにはいかない。

私は彼の『専属メイド』なのだから。

(私だけお仕事……だから……っ♡)

ドジで、から回ってばかりで、取り柄といえば愛嬌くらいしか差し出せない。

そんな私が、何故ご主人様である彼とこんなことをしているのか。ことの発端は、数ヶ月前に遡る。

「日和を、僕の専属にしようと思ってるんだ」

匡哉様の部屋に呼び出され、そんな話を切り出された私は曖昧だった文言を思わず繰り返した。

「専……属………?」

（つてことは……出世!?)

自慢ではないが、私は要領がしこたま悪い。

両親と早くに死に別れ、女手一つで私を育ててくれたおばあちゃん
は、たくさん笑い皺が刻まれたお顔でよくこう言っていた。

「日和は、愛嬌が取り柄だからね」

裏を返せば「それ以外に取り柄がない」である。とりわけ、要領と

いう点においては私に心底優しかったおばあちゃんでさえ遠い目をさせてしまうほどで、「おばあちゃん、ボケなくていいわあ……」と何度呟かれたか分からない。

そのおばあちゃんのおかげで神崎家という勤め先に恵まれたけれど、おばあちゃんにどこか似ているメイド長にさえ「……貴方は、愛嬌があつて良かったわね」と言われるほど、要領の悪さにおいては折り紙つきである。

なのに。なぜ。

有り得ない、と驚く私に、匡哉様はのんびりと続けた。

「僕も男だから、そういう処理が必要だね」

「……え？ あつ、はい……？ ……はいっ？」

「専属のメイドを選ぶように父から言われてたんだ。それなら、日が良いと思つてて」

「……」

そういう処理。そういう。so you。

(まさか。いや、でも、それ以外に……)

「ええつと……？　そういう……処理、とは………」

「性欲の処理、だね」

「え？」

「え？」

「えっ？　え??　性欲……えッ……？　……うえええ……っ!?」

(匡哉様の……!?　いや、匡哉様『に』性欲が……!?)

なんせ四六時中、春風に包まれているのではなからうかと思うくらい爽やかな方なのである。トイレすら必要がなさそうな造形のお顔立ちに、あまりにもそぐわない。適切な言葉が見つからず、思わず口をポカンと開けてしまった。

「日和？」

「あつ、ご、ごめんなさい……っ！ きよ、匡哉様からそんな言葉が出たのが……その……びつくりして……！」

「はは、これでも僕も男なんだけどね」

「ぞ、存じております！」

苦笑して返されたから思わず勢いよく返してしまうと、匡哉様はクスクスと笑った。

「どうやら、結婚するまでに余計なトラブルを起こしてほしくないみたいだね。のらりくらり交わしてたんだけど、最近しつこくつてさ」

「……」

結婚という言葉に、少しだけ傷ついた自分がいた。けれど、すぐに思い直す。

（……………私が傷つくのは、おかしい）

匡哉様は見目も、家柄も、性格も、何一つ欠点がない。なんなら、取り柄しかない。

そんな彼が、いつか見目も家柄も性格も良いお方と家庭を築くのは至極当然なことなのだ。

（おこがましい……）

どこかじつとりした「いつか」が、勝手にのしかかってくる。それをどうにか振り切ろうとしていると、匡哉様は何一つ変わらない調子でこう続けた。

「それで、一番に日和の顔が浮かんだんだ」

「……………へ??」

相変わらず、彼は春風に包まれている。私は心当たりがなさすぎて、またもや口をポカンと開けてしまった。

私の要領の悪さは、もちろん匡哉様を前にしても平等だ。自慢では

ないが迷惑しかかけていない、という自覚があつた。なのに。

「ど、どうして……………っ」

「? どうしてって?」

「だ、だって……………! 私はず、えつと……………取り柄が、ない……………です、し……………」

言いながら、惨めになつてどんどん声が小さくなつていった。それでも事実だから、自然と視線が下を向く。

けれど、匡哉様はあつけらかと続けた。

「そうかな? 日和は可愛いよ」

「ひえっ」

恐れ多い言葉に間拔けな声を上げてしまつても、ぼいぼいと言葉を続けてくる。

「いつも一生懸命で、明るくて、笑顔が素敵で」

「えっ、いや、あの……っ！」

「一緒にいて楽しいし、見てるとこっちまで笑顔になれるし」

「ひいっ……そんな……！ 匡哉様、その辺で……！」

「それに」

受け止めきれずに戸惑っていると、匡哉様はふっと笑った。思わず目を奪われる。色素の薄い瞳は、しっかりと私を見据えていた。

（……綺麗な人）

太陽を透かすような髪色と瞳の色は、お祖父様譲りだと言っていた。ため息が出るほど美しいお方だ。

その彼が、私に向けて美しい瞳を細くする。

いつもの優しい声。の、はずなのに。

「日和は、……『魅力的』だよ」

ぞわり。

寸分違わないはずの声色に、皮膚が粟立っていくのはどうしてだろう。

「ッ……………」

湿った手のひらで、スカートをキュツと握ってしまふ。不思議と、誰かに縋りたい気持ちだった。

（目が、逸らせない……）

皺になってしまふような私のスカートに、匡哉様は目をやってくれなかった。

「日和さえ良ければ」と、優しい優しい声でニコツと微笑む。

「僕の専属メイドとして、奉仕してくれないかな」

「……………」

私はあの日、決めたのだ。

彼に報いることができるのなら。

（彼のそばに、いられるのなら）

「……はい。私で、よろしければ」

答えるように、彼に向けてニコツと微笑んだ。
愛嬌だけが、私の取り柄なのである。



「日和、明日はいつもより三十分早く出ることになったから、朝食の時間を少し早めてもらっていいかな？」

「はい、承知しました！ 後ほど手配しますね！」

「うん、よろしくね」

神崎家はとても広い。一人一人のお部屋にシャワールームやトイレがあるほど広く、それぞれが自室でほとんど生活している。

だから専属メイドという役職は名の通りで、匡哉様の身の回りのことをほとんど私が担うようになった。なんというか、一人暮らしのサポーターに近いかもしれない。

最初は、それはもう目も当てられないミスばかりだった。多大なるご迷惑をおかけしたけれど、最近はやっと専属メイドらしい働きができるようになったと思う。

……が、

（『そういう処理』、は……!?!）

この数ヶ月間、私はまっつったく、と言うしかないほど匡哉様に出されていなかった。

（期待してたとかではない……と、思う……けど……!）

毎晩、匡哉様に「おやすみ」と優しい笑顔で言われると、正直がっくりしてしまう。今日も、か……、と上下お揃いの下着が途端に惨めになるのだった。

（また先輩方に嫌味を言われそう……）

大きなお屋敷とはいえ、私が匡哉様の部屋にいる時間は筒抜けだ。加えて、私の反応もとても分かりやすいのだろう。「性処理係が機能していない」ということは、メイドの間では周知の事実になってしまっていた。

ただでさえ、匡哉様はメイドたちの憧れだ。

「匡哉様はお優しいから、お情けをかけてくれたのね」

そんな風に言われてしまうのも、当然なのかもしれない。そもそも、本来クビになってもおかしくないとこころを匡哉様に拾われたようなものなのだ。

「せめて、匡哉様にご迷惑をおかけしないように努めなさい」

「……はい」

言われて当然……とは自分でも思うけれど、そこまで言われてしまうと胃がキュウツと痛くなる。聖母のようなメイド長は「頑張ってるわね」と言ってくれるものの、迷惑をかけていないという自信はなかった。

昨日だって、匡哉様のティーカップを割ってしまったばかりだ。彼は穏やかに「もう随分使った物だから大丈夫だよ」と言ってくれたけれど、私の卑屈さでその言葉は「長年愛用していたものを壊した」と変換され、胸が痛むばかりだった。

（離れることを考えても、痛むくせに……）

何をしていても、ちくちくと刺さるこの痛みから逃れたい。

私がそんなことばかり考えるようになるのに、そう時間は掛からな

かった。



（今日こそ、言う!!）

日に日に強くなる「離れたくないけど離れたい」を抑えるために、私の中の選択肢は徐々に狭まっていた。

（『お仕事を辞める』、って……!）

「何よりも早く、明快な解決策」に縋るしかなかったのだ。それが最善だとすら思い、切り出すチャンスをいつも狙っていた。

——そんなある日。匡哉様の就寝前である。

彼が郵送物を確認しながら雑談を投げかけてきたから、「チャンスだ」と思った。

「つ……………」

いざ話を切り出そうとすると、何かに掴まっていた気がして、メイド服のスカートをキュツと握りしめた。乾きやすいように麻が混じった生地が、手のひらの汗をサラツと吸い取っていく。

「あ、あのつ、匡哉様……………」

「ん？ なんだい？」

声をかけると彼は優しく笑ってくれた。デスクに向かう彼は、スマートにペーパーナイフを滑らせている。

「お、お話が……………」

なんだか悪いことをしているような気になって、思わず視線が落ちていく。けれど、逃げてはいけない。意を決して、再度視線を上げ

た。

「うん？」

すると、私に向けてくれた優しい瞳と声にすぐに捕まって、ぐうつと喉が詰まってしまう。

(……悲しい)

この人のそばにいられない自分が、不甲斐ない。

それでも「早く楽になりたい」という気持ちを、弱い私はどうしても抑えられなかった。

「そ、の………私……やつ、辞めようと………思つて、て………！」

「……辞める？」

私の「辞める」という言葉に、匡哉様は目を丸くさせた。少しでも困ったような表情をして、問いかけてくる。

「それは……僕の専属を？」

「いえ……そうじゃなくて……このお仕事、自体を………」

まるで、懺悔をしているような気持ちだ。

狭くなってしまった喉をなんとかこじ開けて言う、匡哉様は持っていたペーパーナイフを音も立てずに丁寧に置いた。そうして、椅子から立ち上がる。

「座って、日和」

すぐそばにあるソファを促されたから、戸惑いながらも座らせてもらった。ベロア調のしっとりした座面は驚くほど柔らかく、逆に落ち着くことができない。

「隣、座るね」

そう断って匡哉様が隣に座ると、思ったよりもソファが沈んでいたから驚いた。

上品な顔立ちも手伝ってか華奢に見える分、彼の男性性を密かに感

じる。

(ドキドキしてる場合じゃないのに……)

ソファアに座ってもなお、スカートの生地を握ることをやめられなかった。黙りこくった私を覗き込むようにして、匡哉様が相変わらず優しい声で聞いてくる。

「理由を、聞いてもいいかな？」

「っ……きよ、匡哉様に……」

「うん」

「これ以上……迷惑を、かけたくなくて……」

「迷惑？ 僕はそんなこと微塵も思っていないけど」

「で、でもティーカップは割るし、スーツの用意も忘れるし、ハンカチをアイロンで焦がしたこともありますし、」

「形あるものはいつか壊れるのが当たり前だよ。それに、忘れ物した

ところで仕事には何の影響もなかったんだからさ」

すぐさま返された言葉には、なんだか圧を感じた。懺悔を許されない気持ちで、またスカートを強く握りしめてしまう。

「わ、私より適任の方は、他にもいらっしやいますし……!」

「僕自身が日和がいいって決めたんだよ。その適任って、誰が決めるの?」

「っ……!」

そんなことを言われてしまったら、正直ぐうの音も出ない。言い負かされてしまっているうちに、匡哉様は淡々と続けた。

「それとも、日和が僕のことを嫌になった?」

「いえっ! そんなことは、絶対……!」

「じゃあ、どうして?」

強く否定するために顔を上げたら目が合ってしまった、また逸せなく

なった。

薄い色素の瞳は私の頭の中を覗き見ているように美しく、自白するかのようにつらつらと言葉が出て行ってしまう。

（バカだ。言わないで。言ったらだめなのに。惨めで、情けないのに）

「っわ……私が良くても、周りの方は、きっとそう思っています。……お情けで私を専属にして、だから抱かれもしないって……そ、そんな惨めな女を近くに置いてちや、ダメです」

きつと、もつと上手い言い方があったのにどうにも情けない言葉ばかりだ。

もちろん彼は、私が専属メイドだからといって嬉々として「命令」をする人ではない。でも、命令されなきや、せっかく私を選んでくれたのに、私のいる意味がないじゃないか。

抱いてもらえないのが、辛い。

惨めだ。逃げたい。今すぐ、この場から消えてしまいたい。

「……」

急な沈黙に、体の中身が絞られているように苦しくなった。沈黙を破りたくて出てきた言葉は、ますます惨めな言葉である。

「わ、私が……私が、何もできないから……何も、命令してくださらないのなら……いつそ……」

身勝手にも程がある言葉を投げてしまいそうになっていたら、その前に匡哉様がピシツと言った。

「誰が、そんなことを言ってたの？」

ぞわり。

皮膚が撫でられたように粟立つこの感覚を、私は以前も感じたことがある。どこだっけ。どこで、こんな恐怖を感じたんだっけ。

何かに追われるように考えを巡らせてしまっている私に反して、匡哉様は優雅な物腰だった。

口元に手を当てて少し息を吐く。ため息に似た低さに、思わず肩がビクツと震えた。

「……僕が日和のことを、お情けでそばに置いてるって？」

「その……み、みんな、そう言つて……」

「『僕』はそんなこと、一言も言つてないよ」

「あっ……」

（本当だ）

迷惑をかけたのは本当かもしれない。けれど、それをお情けだと表現したのは、匡哉様じゃない。

どうして今、そんな簡単なことに気づいてしまうんだろう。

匡哉様はずっと、自分の意思で私を選んだって言ってくれてたの

に。

周りの言葉を勝手に真実と思い込んで、落ち込んで、こうやって匡哉様に心配までかけてしまつて。

（自分のことしか見えてなかった）

なんて浅はかなんだろうか。自身の不甲斐なさが余計に重なつて、絨毯を踏みしめる足の裏がさらに沈んだような気がした。

「日和は、僕よりも君を傷つけるような人間の言うことを信じるんだ？」

風いだ海のような穏やかさは、冷ややかさとも似ている。知らず知らずのうちに昇つていた血がさあつと引いていった。

「も、申し訳ありません……っ！」

「うん」

とてもじゃないけれど、目を合わせられなかった。手のひらが痛く

なるくらいスカートを握り、裏返りかけた声で謝ると、匡哉様の手はその手をそつと撫でる。

「ッ……!？」

暖かくて大きな手のひらが、私の手を隠してしまうように、すつぽりと覆っている。

思い出した。この感じ。あの時、「魅力的だよ」と彼は私を見据えて言った。

（あれは、きちんと、）

「日和」

過去と現在を右往左往している私の手のひらを、彼の手のひらが掬い上げる。そうしてそれが薄い唇まで誘われていくのを、私は固まっていた瞳孔で見つめるしかなかった。

「……っ………」

冷え切った手の甲に彼の唇が押し付けられると、血液が止まってしまったかのようにぴくんと指の先が跳ねた。そんなところに他人の唇が当たるのは初めてで、知らない感覚に心臓がどンドンうるさくなつていく。

自分のことばかり考えていたから、気づけなかったんだろうか。

——あれは、きちんと、

(性欲)

匡哉様の性欲を、ぶつけられていた。

「僕は今、少し怒ってるよ。……分かるかな？」

「っ……！」

ぐわんぐわんと力強く渦巻いているのは、恥ずかしさよりも恐怖であるように思う。

どうしてだろう。何の経験もありはしないのに、「来る」と思つて

しまう。

今夜、私が今まで少しだけ期待していたことが、来てしまふ。

「あの、私……っ！　ご、ごめんなさつ……………」

「謝るのはもういいよ。でもさすがに、ここまで何も伝わってないなんて思つてなくて」

「え…………？」

「少し、お仕置きが必要かな」

お仕置き。

子どもの頃に恐れたものを、どうしてこんなに官能的に思つてしまふんだろうか。ゴクリ、と喉が勝手に上下した。

（匡哉様のお仕置き……………っ）

「おいで、日和。——ベッドに行こう」

大きな手は、軽く引いただけのように見えたのに思ったよりも体が

ぐんと引つ張られた。男性だ。紛れもなく。

私は今夜、この男性の性欲を受け取ることになるんだ。

状況についていけてるのか、置いて行かれていいのか、自分でもよく分からない。言い訳もできないから黙ってその手に引かれていった。

「日和」

匡哉様はベッドに乗ると、まごまごしている私を静かに叱りつけた。優しい声なのに、「さっさと来い」と言われているようで慌てて匡哉様を追いかける。

ギシ、とベッドの音が鳴る。私がベッドに膝を埋める間に、匡哉様は長い脚であぐらをかいていた。そんな姿を初めて見るような気がして、どこどことうるさかった心臓が今度はキュンと小さく跳ねる。心臓の機能が馬鹿になってしまったみたいだ。

「服を脱いで」

「……は、い……………」

逆らう選択肢など、私にはない。

ベッドに膝立ちになり、言われるがまま匡哉様の目の前でのワンピースのボタンを外した。ワンピースタイプのメイド服はボタンの径が小さい。指先がおぼつかなくてなかなかスムーズにいかない私の姿を、匡哉様はじつと見ていた。

（ッ……恥ずかしい……………）

それでも、首元から腰のあたりまでのボタンを外して、肩からストンとワンピースを落とす。垂直方向にワンピースが消えていくと、私は一瞬にして下着姿になってしまった。

外気が肌に触れ、恥ずかしさで呼吸がか細くなる。匡哉様は、余裕を持った穏やかな声で言った。

「可愛い下着だね」

「え……あつ……ありがとう、ございます……?」

「でも邪魔だから、それも取ってしまおうか」

「……ッ……!」

どんなに躊躇いの気持ちがあっても、私に選択肢なんてない。そもそもこれは、どこかで私が期待していたことでもあるのだ。

背中を手を回し、ブラジャーのホックをパチンと外す。熱い頬を保ちながらおっぱいを晒け出し、ブラジャーを取った。

匡哉様は、ショーツだけを纏った私の体をまじまじと見ながら笑う。

「思ったよりもあるんだね、日和。すごくエッチな体だ」

「っ……」

下品な評価をされ、思わず肩がびくつと揺れてしまう。けれど、尚

も胸は高鳴っていた。

(匡哉様に……エッチって、言われた………!)

衝撃のような、羞恥のような、歓喜のような。ともかく、言葉が出ない。

そんな私を感じ取ったのか、彼は私の言葉を待たずに言った。

「僕がこういうことを言うのは、意外だった?」

意外だと答える前に、今度は手を広げられる。

「おいで。背中を向けて、こっちにきて」

彼のペースで着実に進んでいく状況に、身を任せることしかできない。

言われた通りに背中を見せながら近づき、あぐらをかいだ彼の足の間に収まった。

男性の体に、こんなに近づくのは初めてだった。私より長く、太い

脚。固いお腹。広い胸。

（「男の人」……だ……）

誰もが見惚れる美貌の匡哉様が、こんなにも「男の人」だと、私は真の意味では分かってなかったのかもしれない。

自分と違う体温をじんわり感じていると、匡哉様の二の腕が私のお腹を抱き締めた。この腕にかかれば、私の腕なんか『細腕』でしかないと思った。

「ひえっ……！」

「残念ながら、僕もそこら辺にいる男となんら変わりはないんだよ。
日和」

「あ、なっ……んう……っ♡」

何の断りもなくモニュ♡と胸を揉まれてしまい、一瞬抵抗しそうな声が出た。なんとか抑え、揉まれているおっぱいに目を向ける。

（匡哉様に……おっぱい、揉まれちゃってるっ……♡ 匡哉様の、おっきい手に……っ♡）

心臓の音がバレやしないかと思うくらい、ドキドキしていた。

匡哉様は、ドキマギする私なんか一切気にし定内容だった。大きな手の平に収めたおっぱいをムニ……っ♡ムニ……っ♡と楽しんでいる。

「こうやって感触を楽しむだって好きだしね。日和のおっぱい、柔らかくてあつたかくて、気持ちがいいよ」

「っ……ん……♡」

男性……しかも、あの匡哉様におっぱいを堪能されているという事実がくすぐったかった。何度も呼吸を忘れそうになり、慌てて息を吸う。

「匡哉、さま……ッ……♡ ふっ……あ……♡」

「日和は『未経験』で、間違いないかな？」

「は……はいっ……♡ 経験、は、ない……です……っん♡」

「だよ。でも、痛いことも怖いこともしないから大丈夫だよ。そういう趣味はないからね」

匡哉様は、誰にだって優しい。それは、私も自信を持って言える。

けれど、「そういうのは趣味はない」には何故かすぐには頷けなかった。

（なんだかずっと、意地悪されてる気がする、し……っ♡）

もちろん返事をしないわけにもいかないから、掠れそうな声で返事をする。

「は、い……♡」

「うん、お利口さんだね」

子どもに言うような甘い声が耳の近くで響き、ビクツと肩が跳ねて

しまう。自分の体が、したことの無い反応ばかりするからいちいち緊張した。

「はは」

息がかかりそうなほど近い距離で、匡哉様はくすくす笑う。おっぱいはむにゅ♡むにゅ♡と楽しまれたままで、落ち着ける暇が一切ない。

「もうそんなに可愛い反応するんだ？」

「か、わい……………っ♡!？」

「可愛いよ、日和は。少し敏感なのかな？ 耳元で喋っただけなのに

ピクついちゃうなんて」

「わっ、わかりま……………せ、ん……………っ♡」

「はは、そうだよ。初めてなんだし、分からないのが当たり前だよ」

いつもと同じ穏やかで優しい声なのに、私の緊張は解けてくれなかった。

（やっぱり、いつもと違って意地悪な……気がっ……♡）

何かを覚悟して小さく息を吞むと、匡哉様は「じゃあ」と変わらな
い調子のまま囁いた。

「少し触って、確かめてみようか」

「へっ……？」

何を？と聞きたかったけれど、遅かった。

おっぱいを見下ろすと、乳房を掴んでいた匡哉様の手から、人差し
指だけが浮いて頂点に向かっていく。

（嘘、待って、待って、あ、あ、匡哉様の指が……っ♡ 先っぱ
にっ……♡♡♡）

っん♡

「あんっ♡」

露になった乳首の先を、人差し指で軽くつつかれただけにも関わらず、私の喉からは甘ったるい声が飛び出ていく。反射的に口を結ぶと、遅れて顔がどんどん熱くなった。

（な、なんで……♡ 今、声が……勝手に、出て……♡）

「ははっ、やっぱり敏感だ。少しつついただけなのに、すっごくエッチな声が出ちゃったね？ 日和」

「……♡ ツあ♡ や、……ん……♡ 匡哉、様♡」

っん……♡ ツん……♡

私の乳房をむに♡と手のひらに収めたまま、匡哉様の人差し指は優しく乳首をつついた。私の頂点の位置を、入念に確認しているかのようだ。

（なに……これえ……♡ つんっん♡ってされてる、だけなの

に……♡ 匡哉様にエッチな声出てるって言われるの、恥ずかしいの
に……♡ 声、が……勝手に……っ♡)

匡哉様の指が触れるたびに、鋭い快感が喉まで上がってきていた。

漏れ出ないように口をキュツと閉じると、匡哉様は優しく、まるで
犬を叱るかのように私を嗜める。

「こら、日和。声を抑えちゃダメだよ。口を開きなさい」

「で、も……っん♡ 声、出ちゃうの……恥ずか、しい……です……っ

♡ ふあっ……♡ んんッ……♡」

「日和」

「っ♡ はっ、はいい……っ♡」

今度はしっかりと叱られて、慌てて口を開く。

そうだ。これは「私の仕事」であり、匡哉様は純然たる「私の上司」
なのだ。

(恥ずかしくても、言う通りにしないと……っ♡)

「あッ♡ んっ……あ♡ はあ……っ、あ♡ あんっ……♡」

「乳首触られるの気持ちいい？ 日和」

「ッ……は、い……っん♡ 乳首、っんっん♡って……ッあ、は……っ♡ 気持ち、いい……です……っ♡」

「うん。いい子だね」

犬を褒めるような声色だ。そんな匡哉様の人差し指は、今度は犬を撫でるように私の乳首の先っぱをすり……っ♡すり……っ♡と撫でてくる。

「あっ♡ やあ……ッ♡ んっ♡ 匡哉、様……ッ♡ それ……っや、だあ……っ♡ ぐう……っはあ……♡」

大きな指の腹が、腫れ上がった頂点をよしよし♡よしよし♡と可愛がる。その動きに合わせ、血が集まった先っぱはぷり♡ぷり♡と揺れ

ていた。その様がなんともいやらしく、思わず目を瞑ってしまふ。

(あ♡　なんでえ……っ♡　つんつん♡もすりすり♡も……っなんでこんなに、気持ちいいの……っ？♡　またエッチな声出ちゃってる……っ♡　乳首弄られるの♡　気持ちいい……っ♡♡)

「ははっ……日和の可愛い乳首、どんどんぷっくり♡してきたね。自分でも分かる？」

「やあ……っん♡　言わないで……っ♡　くだ、さ……あッ、ん、う♡」

「でも、たったこれだけで根を上げられたら困ってしまうよ、日和。

——これからもっと、いやらしいことをするんだからさ」

「……っ……♡　は、い……っ♡　ごめんな……さ……っん♡」

「いい子」

すりすり♡と乳首を擦られながら褒められると、子宮のあたりがジ

ンジン♡と疼く。その疼きで甘い声を出していると、匡哉様はいつもの優しい口調で言った。

「ほら見てごらん、日和。日和の乳首、ピンピン♡に硬くなつて可愛く勃起しちゃつてゐるね？ 目を瞑つてゐるなら開けて。とつてもいやらしいから、きちんと自分の目で確認しなさい」

普段の匡哉様は、ほとんど「命令」をしない。どんなことでも大概が「お願い」に近かつた。そのせいか、いつもと同じ口調で「しなさい」と言われると、体が勝手に従つてしまう。

「はあっ……♡ つふ、ん………♡♡」

命令通りに、自身の胸を見下ろすと、そこには見たこともないほどピン♡と主張した乳首があつた。普段の形を思い出そうにも、もう難しいほど卑猥な形だつた。

（ほんとだ……♡♡ 乳首、ぷく♡つて腫れてる……♡♡ こんないや

らしい形、見たことない……っ♡ 匡哉様の指のお腹で、すりすり♡って優しく撫でられて、出てきちゃったんだ……♡ 私の乳首、匡哉様のせいで、どんどんエッチになっちゃってる……っ♡)

ぷっくり♡勃起した乳首から目を離せないでいると、彼の太い指がすり♡すり♡という動きに少し圧を加え始めた。やがて、その圧は明確にくりっ♡くりっ♡と乳首を転がし始める。

「あッ♡ ん、匡哉……様あ……っあ♡ そんな、にっ……ん、あ……ッ♡ くりくり♡しちや……ッ♡ あ、ああ……っ♡」

「乳首くりくり♡って弄られるの、気持ちいいでしょ？ 日和の体、こねるたびにビクビク♡って跳ねちやってるね。ふふ……可愛い」

「だ、めえっ……♡ んッ♡ あっ、ひう……っ♡」

「痛い？」

「痛くは……ッない、ですけどお……っ♡ あ、んん……っ♡」

「気持ちいいのなら、ちゃんと気持ちいいって言わないと。日和に痛い思いをさせるつもりはないんだからさ。『そういう趣味はないよ』って、さっき言ったでしょ？」

「っ……は、い……♡」

彼はそう言うけれど、やっぱり意地悪をされているような感覚はずっとあった。けれど、これは仕事だ。余計なことと言わず、素直に返事をした。

すると、それを受け取った匡哉様は朗らかに言う。

「じゃあ、今度は少しだけ引っ張ってみようか」

「えっ、ひ……ッうん……っ♡?!」

こしっ……♡ こしっ……♡ こしっ……♡ こしっ……♡

匡哉様の人差し指と親指に乳首を挟まれ、根本から頂点へと擦られる。腫れた乳首をさらに引っ張り出すように、それは何度も何度も繰

り返された。

（私の乳首、引っ張り出されちゃってるっ……♡ ピンピン♡乳首を
こしこし♡こしこし♡って、何回も♡ エッチな触り方……気持ちい
いよお……♡♡）

「引っ張るのはどう？ 日和」

「あっ、あッ♡ 気持ちいい♡ ですっ、それ……ッ♡ あっ♡ 乳
首♡ ずっと気持ちいい……っん、あぁっ♡」

「どんな風に気持ちいいのかな？」

「きよ、匡哉様の指が……っ♡ あったかくて、おつきくてえ……ッ
あ♡ こしこし♡って、されたら♡ ふわっってお腹に……♡ 気持ち
いいのっ、んッ……キちゃい、ます……っ♡ あ♡ あッ♡ エッチ
な声、止まんない、れすうっ……あぁっ♡」

「本当に日和は素直でお利口さんだね。上手に言えたから、たくさん

こしこし♡して、もつともつと乳首おつきくしてあげようね」

「あっ♡ やっ♡ んん♡ 匡哉様……っ♡ いっぱいしちゃ、らめっ……っう、ん♡」

「ほら、下から上に……こしこし♡ こしこし♡ 大きなあれ♡
大きなあれ♡」

「あっ♡ あッ♡ あ……ああっ♡♡」

しゅッ♡しゅッ♡と下から上に何度も扱かれ、その度にビクン♡ビクン♡と腰が揺れてしまう。優しくされてるのに、大袈裟なほど甘い声が抑えきれない。

子宮がじくじく♡と疼き、下着がじつとり濡れている。事前に勉強した通りだった。

（ああっ♡ お股、ぐちよぐちよ♡になっちゃってるよお……ッ♡
乳首優しく擦られてるだけなのに、何で、お腹がっ……♡ キュン

キュン♡ってしちゃってるう……っ♡♡)

絶え間なくやってくる快感に耐えきれなくなり、足をもじもじさせていると、匡哉様が「日和？」と私の名前を呼んだ。彼の指は相変わらず私の乳首を挟んで、シコシコ♡シコシコ♡と可愛がっている。

「どうしたの？ 足、落ち着きがなくなってきたね」

「ひうつ……ごめん、なさつ……っあ♡ い……ッ♡ つん、あ……ッやあ♡」

「怒ってないったら。聞いているだけだよ。足……どうしたのかな？」

「んっ♡ あッ、あっ♡ そのっ……ムズムズ♡って、してえ……っん♡ あ♡ あ……ッ♡」

「トイレ？」

「ちがっ♡ いッ……ますっ♡ ぐ♡ そうじゃッ……なっ……♡」

「はは、ごめんごめん。エッチな気分になってるだけだよね？」

「くくく……♡」

くねくねと揺れてしまう太ももを、匡哉様の大きな手のひらでねつとりと撫でられる。あまりにも官能的な撫で方に、ゾワゾワと鳥肌が立っていった。

もう一方の手で私の乳首をくにくにくにくと倒し、尚もいやらしく虐めてくる匡哉様は、静かな声で私に言った。

「足を開いて」

「は、いつ……♡」

太ももの内側に置かれた匡哉様の手のひらは、「開いて」ではなく「開け」と言っているかのような圧を持っていた。促されるように開脚すると、匡哉様は優しく言う。

「そう。いい子だね」

「ッは……ん……♡」

M字開脚をさせられ、今度はその膝をすり、すり、と撫でられた。

慰めるような暖かくて優しい手のひらに、何故か子宮がきゅうう♡と縮こまる。

(匡哉様に、はしたない格好見られてる……♡　こんな……恥ずかしいことなのに……♡)

同性の前だとしても、恥ずかしい格好だ。こんな格好、本来なら一番「見せたくない人」なのに。

でも、その「見せたくない人」に強要された格好を、「見せたくない人」は泣きたくなるくらい穏やかな声で私を褒めてくる。夢のような非現実感だった。

「すごく綺麗な肌だね」

「あッ♡　ッ……んん……っ♡」

私の膝をいやらしく撫でていた匡哉様の手のひらは、すすすつと滑

り台を降りるようにしてショーツへ辿り着いた。その生地に触れられた瞬間、「触られた」という思いでピクツと震えてしまう。

けれど、匡哉様は躊躇なくクロツチの部分に到達した。それどころか、中指と薬指をぬる……ッ♡ぬる……ッ♡と丁寧丁寧に、滑らしていくのだ。

「や、あ……ッ♡ ああっ……♡」

(いつの間に……こんなに、濡れて……っ♡♡)

自分が思っているよりも数倍湿ってしまったているクロツチに、かあつとした恥ずかしさが込み上げる。

(下着越しなのに、匡哉様の指がぬるぬる♡って滑ってる……ッ♡恥ずかしいよおっ……♡♡)

あまりの羞恥心で反射的に足を閉じてしまうと、匡哉様はすぐさま私を叱った。

「こら。開きなさい」

お叱りと並行して、後ろから匡哉様の骨ばった足の甲がやってくる。私の膝の下から入り込んできたそれが私の足を固定し、強制的にM字開脚をさせられた。

そんな挙動に戸惑っている間にも、匡哉様の指は私のクロツチを擦るのをやめてくれない。

「あっ♡ や、ああ……っ♡」

「すごいね、下着越しでも分かるくらいぐっちより♡になってるよ、日和」

「んうっ♡ あッ……や、だあ……っ♡ あっ♡ 匡哉、様あ……あッ、ん♡」

「やだ？ でも、ぜーんぶ日和のお汁だよ？ 聞こえるでしょ？ ぬちぬち♡って、いやらしくて……可愛い音だね」

中指と薬指で擦られるたびにぬちゅッ♡ぬちゅッ♡と恥ずかしい音が鳴っていた。ショーツを歪ませるほどの圧で入り口を擦られると、感じたことのない快感で高い声が口から漏れ出ていく。

（すごい♡ こすこす♡って擦られるの、気持ちいいよ♡ なんで♡ なんてたったこれだけで、こんなに気持ちいいの♡ なんで、腰ピクピク♡って抑えられないの♡ 匡哉様の前で♡ 声も、音も、全部恥ずかしいのにつ……♡♡）

「ッん♡ は……匡哉、さま……ッ♡ んうッ♡ あっ♡ ああッ♡」

「ははっ、日和のクリトリス、ぴよこん♡って硬くなっちゃってるね？ 可愛い。……可愛いから、ちよつとだけ引っ掻いてみようかな」

「えっ、や……ッ♡」

「すつごく気持ちいいのくるから、びつくりしちゃうかもね。でも、頑張るんだよ？」

「ッ、待つ、て……っ♡ 匡哉、様ッ……♡」

「ほーら……せー、のっ♡」

かりッ♡♡

「ひッ、んんっ♡♡」

中指の爪が入口の少し上を引つ搔くと、電流が流れたかのようにだらしない声が出てしまった。膨れたそれを少し引つ搔かれただけなのに、見合わない強い刺激に驚いて脳内がひどく混乱している。

（なんで♡♡ なに、これ♡♡ なんでっ♡♡ 今のっ♡♡ しゅごい♡♡ クリトリス♡♡ しゅごいの、きたあ♡♡）

「はは、日和にはまだ刺激が強かったかな？ でも、下着越しだからもう少し頑張ろうね」

「おッ♡ や♡ 匡哉様、だめっ♡ だめ♡ だ……めえッ♡♡ な
の♡ にいッ♡♡ ぶ、ああ♡♡」

かりッ♡ かりッ♡ かりッ♡ かりッ♡

引ッ搔かれるたびに腰が引いてしまうのに、彼の指はそれを執拗に
追いかけた。彼の足で固定されているせいで膝も閉じれず、開脚をし
たままひたすらクリトリスをカリッ♡カリッ♡と刺激される。

「あっ♡ や、なんでっ♡ こ、れ……ッあ♡ あっ♡ そこ♡♡
だめ、だめっ♡♡ カリカリ♡しちや、やらあっ♡♡」

「クリトリスカリカリ♡されるの気持ちいい？ 日和。ちよつと引ッ
搔いてるだけなのに、腰がカクカク♡ッて止まらなくなつちやつた
ねえ。はは……あー可愛い……日和の可愛い可愛いクリトリス、いっ
ぱい虐めてあげようね」

「やっ♡ あ♡ あ、ぐうっ♡♡」

（クリトリス♡ しゅごい♡ しゅごい♡ 下着の上からカリカリ♡
されてるだけなのに♡ お腹がキュンキュン♡って……ッ♡ しゅご
い……っ♡ 気持ちいいの止まなくて、腰が馬鹿みたいカクカク
♡なっちゃううっ♡♡）

クリトリスをカリカリ♡と虐められると、入り口までぱくぱく♡と
反応してしまう。得体の知れない快感に怖さを感じながらも、匡哉様
の指にいいように喘がされるしかなかった。

（お仕置きなのに♡ お仕置きなのに、カリカリ♡されるの、気持ち
いいよお……っ♡♡）

大股を広げて足を固定され、クリトリスも乳首もカリカリ♡され
て。

そうやって喘いでいると、何かに気づいた匡哉様はふと笑った。

「ああ。ごめんね、日和」

「ふ、え……っん……♡?」

「可愛い下着が汚れちゃうし、これはもう脱いじゃおうか」

「ひッ……♡ あ、待っ……ッあ、やあっ♡」

乳首をカリカリ♡と虐められているせいでマトモな抵抗ができなかった。すぐにショーツのゴムへ匡哉様の指がかけられ、息を呑む。

M字開脚から解放されながら、匡哉様の指をじっと見つめた。

(下着……下ろされちゃう……っ♡)

「……はは、すっごいね」

するゝつと離れていくショーツに、愛液がとろオ……♡と糸を紡いでいた。それを見た匡哉様は、楽しそうな声を出す。

そうして、重さを感じるほどくっつたりとした下着を見下ろし、追い討ちをかけるように言った。

「見てごらん、日和のお汁でドッロドロ♡になっちゃってる。色も変

わっちゃって……日和がエッチな女の子だっということが、よく分かるね？」

「っ……そん、なッ………♡」

「恥ずかしがることはないよ。専属メイドとしてはこの上なく優秀なんだから。……ほら、こんなにしつかり濡らしてくれてるし」

「ッあ……♡ ま、ってえ………♡」

ちゅぷッ♡ ちゅぷッ♡ ちゅぷッ♡ ちゅぷッ♡

露になった入り口を、匡哉様の指たちでねつとりと撫でられる。秘部を直に触られると、さつきよりも強い刺激で声が高くなっていた。

（匡哉様の指が♡ 私の大事なトコロ、優しくなでなで♡ なでなで♡ っして♡ 匡哉様の指♡ 固くて気持ちいい♡ 撫でられてるだけなのに、いやらしい音いっぱいしちゃってるよおっ♡♡）

「いやらしい音だね、日和。水たまりにみたいにぴちやぴちや♡つて」

「あつ、あ♡ や、ああ……♡ ツ♡ お股の音……つ恥ずかしい、です……♡ ツ♡ つん、あ♡」

「日和、お股も可愛いけど、これからは『おまんこ』って言うんだよ。せつかくのセックスなんだから、エッチな言葉たくさん使おうね」

「ッあ♡ ツ……は、いッ……♡ んん……♡ つ♡」

数本の指が一緒くたになって、入り口をぬちゅ♡ぬちゅ♡と刺激する。卑猥な言葉を発するに抵抗感はあるけれど、言うまでもなく拒否なんてできない。

（これはお仕事……なんだから♡……♡）

「お……おまんこ……♡ つ♡ おまんこ、気持ちいい……です♡♡」

あッ、んっ♡ 匡哉様の指、硬くて♡ あっ♡ なでなで♡されるだけで……っ♡ おまんこ、んッ♡ 気持ちいい、ですう……っ♡」
「うん、入り口ちやぷちやぷ♡するの気持ちいいね。日和のおまんこ、お漏らししたみたいにぐっちやぐちや♡になっちやつてるよ？ 僕の指もびちやびちやだ」

「ご、ごめんなさ……いいっ……♡ おまんこちやぷちやぷ♡気持ちよくてっ、あっ♡ あっ♡ い、いやらしいお汁、いっぱい♡ いっぱい、出ちやい♡ ます……ッ♡ あ♡ あっ、いい♡ おまんこちやぷちやぷ♡気持ちいい、ですっ♡ びちやびちや♡にして、ごめん……な、さいっ♡ 匡哉、様アッ……♡♡」

「怒ってないよ。もつとびちやびちや♡にしてあげたいくらいだしね。……とここでここに僕の指を挿れたら、もつと気持ち良くなると思うんだけど……どうかなあ？ 日和はどう思う？」

「ひ、ぐうっ♡」

ぴちやッ♡　ぴちやッ♡　ぴちやッ♡　ぴちやッ♡

匡哉様の中指が、タツプをするように私のおまんこを何度も叩く。その間、蕩けた入り口に指の先が少しだけ沈んでしまうからその度にお腹がきゅんッ♡と跳ねた。

（あ♡　あ♡　匡哉様の指が、私の入り口……出たり入ったりして……っ♡♡）

「あッ、んっ、ッ……♡　匡哉……様……っ♡　入っ、ちやう……♡」

「うん、すぐにでも飲み込んでくれそうだね。日和のおまんこ、少し挿れただけでも僕の指に吸い付いてくるよ？　油断したらそのまま吸い込まれてしまいそうだ」

「ツん♡　そん、な……っ♡」

「本当だよ。ほら……あー……あー……あー……少し力を抜いたら、簡

単に吸い込まれちゃうね」

「え、あっ♡ あっ……っあ♡」

ぬう……っ♡

ちやぷん♡ちやぷん♡と音を立てながら入り口をタップしていた中指が、入り口に触れた状態で動きを止める。すると、その先っぽは重さに負けるかのように緩やかに沈み、ゆうっくりと私のナカへと侵入をしてきた。

「っ……はッ、ん………♡」

異物感。

なのに、それに何故か快感が伴っている。チグハグな感覚に、思わず息を止めてしまった。

（ナカに……沈んじゃう……っ♡♡）

第一関節が入ってきただけなのに怖くなってしまい、匡哉様の服を

キュツと掴んだ。私の恐怖に気付いたのか、匡哉様は落ち着かせるように言う。

「大丈夫だよ、日和。力を抜いて」

耳元で優しく言われると、ほうつと息を吐くことができた。

そのおかげで彼の服を握る手から少しだけ力を抜くと、今度は、乳首をかり♡かり♡と爪の先で引つ搔かれる。

「よそ見をしてないでしつかり喘ぎなさい」と言われたようで、また、彼の服をキュツと力強く握ってしまった。

「大丈夫。日和は気持ちいいのだけ感じていればいいんだよ」

「あんっ♡ やあ……っ♡ 乳首、弄っっちゃ……やらあ……っ♡ ひ、うッ……♡」

「ゆっくり挿れるから、怖がらなくていいよ。今から日和のおまんこに、僕の指が根元まで挿入るからね。ちゃーんと見てるんだよ」

「あっ♡ あっ♡ あっ♡♡♡ 挿入っちゃ、うう……っ♡♡」
ぬッ……ぢゅう……ッ♡

匡哉様に命令されずとも、その様をじいつと見つめてしまう私があった。

太くて長い彼の指が、私の蜜壺にぬぷ……っ♡と沈んでいく。血管の浮いた太い手首が「男の人」で眩暈がしそうだった。

（匡哉様の♡ 匡哉様の長い中指が、私のおまんこに……っ♡ あ♡ あ♡ すごい♡ 触られてる♡ 私のナカ、匡哉様の指で触られてるっ♡♡）

「挿入ってくよ、日和。分かる？ 日和の小さいおまんこに、僕の指がどんどん埋まってくね。ぬぷぷ♡って……すごいね。日和のおまんこ、押し出されそうなくらい狭い」

「あッ♡ あッ♡ 匡哉、様……っ♡ そんな、奥ま、でえ……ッあ

♡ あっ♡ あアッ♡♡」

(なに、これ……ッ♡ まだ奥まで……挿入ってるっ……♡ 匡哉様の指が♡ こんなに奥まで……届くなんて……っ♡♡)

何かが挿入って「怖い」とか「気持ち悪い」とか、そういう感情もきちんとあるのに、何よりも強い「気持ちいい」が横入ってきて混乱する。

そうやって私の頭の中はこんがらがっているというのに、子宮は待ち望んでいたかのようにきゅう♡と絞られていた。

(匡哉様の指……ッ♡ 太いっ……♡ おまんこで分かっちゃうよお……っ♡♡)

「やあつと根元まで挿入ったね。……はは、動いてないのにきゅんきゅん♡締まってる。可愛い」

「きよ、うや……さま………んっ……♡」

「痛くはない？」

「痛く……ない、です……っ♡ でも、匡哉様の指……気持ち、いいから……っ♡ あッ、っ♡ お、おまんこ勝手に締まつちやつて……っ♡ ご、ごめんなさ……ッ♡」

「それでいいんだよ、そのおかげで僕の指の形が分かるでしょ？
ね？」

「ああッ……♡♡」

指の長さを知らしめるように少しだけ曲げられると、ナカをくすぐられた気持ちで濁った声が出た。

（すごいっ♡ こんなに、奥までっ♡ こんなに奥を、匡哉様に触れるなんてえ……ッ♡♡）

「は、つい……♡ 太くてッ……長くて、ゴツゴツしてて……っ♡
ん♡ おまんこできゅう♡ってするの、ッ♡ 気持ちいい、で

すう……っ♡」

「あ……ははっ……。本当に可愛いなあ、日和は……」

「あっ♡ やっ♡ あッ、あっ、待、ってえ……っ♡」

ぬ……ろお……っ♡

おまんこに差し込まれてる中指を、ゆうつくりと引き抜かれる。大股を開いているせいで、その光景がしっかりと見えた。彼の中指は、私の愛液でテラテラと湿りきっていた。

「これから僕が、日和にエッチなことをいーっぱい教えてあげるからね。日和は今みたいに可愛い顔で、エッチな声たくさん出すんだよ？ 今日から、それが日和のお仕事」

「は……ッ♡ あ……っ、あ、あ……ん……っ♡」

ずっ……ぬう……♡

「んッ♡ あ、あっ……ああ……ッ♡」

再び、中指が押し入ってくる。膨れた膣内が匡哉様の指に悦び、
キュン♡キュン♡と絞られるのが分かった。

「大丈夫？」

「はいッ……♡ 気持ち、いい……ですっ……♡ あっ♡ あッ♡」

「日和のお汁、どんどん溢れてきてるね。僕の指がしわしわになっ
ちやいそうだ」

「やあ……っあん♡ 意地悪、言わないでっ……♡ くだ、

さ……ッい、ん♡」

「意地悪？ 普通だと思うけど。それに、これでも優しくしてるつも
りだよ？」

心外そうな声で言う彼に、ぬろろろろ♡とまた指を引き抜かれ
る。

「あつ、あ、あッ……♡」

ぐう♡とやってくる快感に彼の服をまた強く掴む。すると後ろにいる匡哉様は、耳元でクスツと笑った。

「日和にはまだ刺激が強いんだね。大丈夫、すぐに慣れるよ」

経験がない私には、普通が分からない。普通は、もつともつと意地悪だと言うんだろうか。

——でも、匡哉様は。

（普段は、あんなに優しいのに……………っ♡）

いつものギャップで混乱する私に、匡哉様は「それに」と笑った。後ろから弄られているから顔は見えない。けれど、意地悪な顔で笑っている。そう思ってしまうような声だった。

「きつと日和なら、もつとエッチな女の子になれるよ」

「ツ——…そんな、こと…………っ♡」

「そう？　でもおまんこで感じるの、もうすつごく上手だからさ」

にちっ♡ にちっ♡ にちっ♡ にちっ♡

抜かれたり刺されたりする中指が、少しだけスピードを上げる。

長い指は私の最奥まで容易に届き、行き止まりをトントン♡と刺激する。何度もやってくる強い快感の波に、悲しくはないのに何故か涙の膜が瞳を覆っていった。

「あつ、お♡ そんな、こと……ッあ、ん♡ んっ、はあ……ッ♡」

「初めてなのにこんなにぐちよぐちよ♡で、こんなにエッチな声出せるんだからさ。ほら、こうやって腰をヘコヘコ♡させるのも上手だし……自信持っていよいよ」

「やあっ♡ ひう……ッ♡ 指、速くしちや……っあ♡ だめ♡ なの♡ 匡哉、様あっ♡ あッ♡ ああッ♡」

「ああ、そうだったね。日和は、乳首で感じるのも上手だもんね？
弄ってあげるよ」

「ち、違っ……♡ お♡ ひうッ♡ 乳首っ……♡ ら、めえッ♡♡」

ぎゅ♡♡ ぎゅ♡♡ くりッ♡♡ くりッ♡♡

片方の指に乳首を摘まれ、片方の指におまんこの奥をつつかれる。異なる快感に、私の腰はカクカク♡といやらしく揺れてしまっていた。

彼の足に無理やり開脚させられたまま、膨れていくような快感が恐怖が滲む。それなのに、私の喉からこぼれる声はますます甘ったるくなっていた。

（あ♡ やだ♡ やだあ♡♡ くりくり♡♡ トントン♡♡ って気持ちいいの、いっぱい♡♡ だめ♡♡ 変な感じ♡♡ お腹に気持ちいいのが溜まって……♡♡ お腹、変な感じする……♡♡）

何かの上限がやってきそうで足を閉じたくなかったけれど、彼の足が

私の抗議を気にも留めない匡哉様は、絞られていく私の膣内を容赦無く虐めた。いやらしい粘度のある水音が響き、その卑猥さがさらに私の感度を上げていく。

(しゅごい♡ しゅごい♡ 匡哉様の指に弄られて、私のおまんこ、すぐエッチな音出しちゃってる♡ いやらしいよお♡ こんないやらしくてだらしのない姿、見られたくないのに♡ だめ♡ ほんとにだめ♡ 気持ちいいの、おまんこにどんどん溜まってきてる♡ これ以上溜まったら……怖いっ……♡♡)

「よく知ってるね。それはどこで覚えたの？」

「す、少しだけ……っ♡ あッ♡ べ、勉強っ、をっ♡ あ、あっ♡ し、てえ……ッ♡ あ♡ んあッ♡ おあ♡」

「はは、真面目で可愛いね。じゃあ、ここは分かる？ ほら、この……ざらざらしてるっていい」

「あ♡♡ や…：…ッなん、で♡ そこ♡ だ、めえッ…：…♡♡」

お腹側の膣壁をざりざり♡ざりざり♡と押すように擦られて、勝手に腰が浮いていく。ナカがぎゅゝゝゝ♡と締め、いつもなら絶対にできないのに、匡哉様の服を力いっぱい握った。ヨレてしまいそうだとかそういうことは一切考えられないほどの、快感。

(あゝゝゝ♡♡ だめ♡ だめ♡ やばい♡ やばいやばいやばい♡♡ これほんとに♡♡ だめなやつ♡♡♡)

「やだっ♡ そこやだあ♡♡ 匡哉様♡ だめです♡ だめなの♡ あッ♡ そこっ♡ しちゃ、だめ♡ ですう♡♡ あ♡ あっ♡♡」

「ここはね、Gスポットって言うんだよ。指の腹で擦ってあげると、気持ちよくて腰がヘコヘコ♡しちゃうでしょ？ 腰だけ浮いてすごくいやらしいね、日和。ナカもきゅうきゅう♡悦んでるから、もつと

擦ってあげようね」

「だめ♡ だめ、匡哉様っ♡ あッ♡ そこ、だめ、しないれっ♡
おッ♡ あっ♡ そんなに擦っちゃ♡ だめ♡ ほんとに♡ あ、
あッ♡ ツ、だめ、なのおッ♡♡」

「はは、すっごい締め付けた。何かキそう？」

「クるっ♡ 何か♡ 変なのがっ♡ お♡ キます♡ だめです♡
そこ♡ ひうッ♡ ごしごし♡ しちや、らめっ♡ らめ♡ らめって♡
♡ ばあ♡ 匡哉様っ♡ 匡哉様あッ♡♡」

「気持ちいいならだめじゃないよ。その気持ちいいのが一番上まで
行ったら、おまんこきゅっ♡てアクメできるからね。ああ、アクメ
は『イク』ってことだから、これもきちんとかえるんだよ？」

ぐっちゅ♡ ぐっちゅ♡ ぐっちゅ♡ ぐっちゅ♡ ぐっちゅ♡

優しい声とは裏腹に、匡哉様の指は優しさのカケラもない。

自分の体が不思議になる程敏感になつてしまふ箇所を、何度も何度も引つ掻いては私の膣を狭くする。抗えない快感の大きさに、思わず声が大きくなつた。

「だめだめだめ♡ 匡哉様♡ 怖い♡ 怖い、のッ、あ♡ ごしごし♡ やらあッ♡ ごしごしやらのにっ♡ やら、らめッ、らめッ♡ あッ、あ、あ♡♡」

「僕がいるから大丈夫だよ。もう少しごしごし♡するの頑張ろうね。ほら、もっとおまんこ締めてごらん、日和。腰はへこへこ♡してもいいけど、逃げたらお仕置きだからね。頑張れ。ほら、ごしごし♡ ごしごし♡」

「あ~~~~っ、あ~~~~ッ♡ やらあ~~~~ッ……♡」

「あーすごいすごい。痛いくらい締まってきた。ほらほら日和、アクメ頑張れ。もう少しだよ。乳首もつねってあげるから頑張れ。初めて

のアクメなんだから、ちゃんと僕に見せてね？　ずーっと見ててあげるから、可愛い顔でアクメするんだよ？」

「ひッ、あん♡♡」

きゅむッ♡

（だめ♡　だめ♡　乳首ひねられたら♡　腰へコヘコ♡で我慢してたの♡♡　キちゃう♡　キちゃう♡　おっきいの♡　おっきい何か♡　キちゃう♡　アクメ♡　アクメしちゃう♡　見ないで♡　見ないで匡哉様♡♡　あ♡　くる♡　くる♡　くる♡　もう♡♡　くるうッ♡♡）

「あゝゝゝッ……♡♡　もっ……♡♡　ら、めっ……♡♡　いぐ♡　いぐッ♡　いッ……っぐう……♡♡　ッ♡♡　ゝゝゝッ♡♡　♡♡」

ビクビクビクッ♡♡

お腹に溜まった全てが一つになって、小爆発を起こしたみたいだった。「到達した」と言いたくなる快感が私の下半身を痺れさせ、気づけば足の先をピンと伸ばして震えてしまっている。

（これが……アクメえ……………っ♡♡）

匡哉様の指を咥えたままの膣肉が、何度も何度も痙攣していた。

コントロールできない体で呼吸をするのに必死になっていると、匡哉様は私の頭にキスをする。

「上手だね、日和。すごくお利口さんだよ」

慈しむような声は生温く、バクバクと跳ねる心臓が変な方向に飛び上がる。

「今日はこれで終わってあげるけど……」

「ッ……………♡」

匡哉様が喋るたびに、私のナカは匡哉様の指をビクッ♡ビクンッ♡

と締め付けていた。それが絶頂の余韻なのか、私の意思なのか、もう分かったものじゃない。

「これから少しずつ慣らしていくから、そのつもりでいてね」

また、ビクンッ♡と膣内が絞られる。絶頂の余韻によるものではない気がしたけれど、匡哉様は言及しなかった。

ぐったりともたれかかる私に、匡哉様はいつもの嫵やかさを保ったまま言葉を紡ぐ。

少し、低い声。

「これからは、ミスをするたびにお仕置きがあると思いなさい」

「っ——……♡」

私の要領のなさは、天性である。

「だから、お仕事——……頑張つてね？ 日和」

それを、彼も嫌と言うほど知っているはずなのに。

（どうせ明日も……ドジをしちゃうのに……っ♡）

どこか浮き足立つような思いは『求められたから』なのだろうか。出どころが分からない甘美な幸福感が息苦しいようで、心地が良かった。

「は……い………っ♡」

そう返事をする、匡哉様は「いい子だね」と私を褒めてくれた。私の頭に擦り寄った彼の体温に、私のおまんこは再びじゅん♡と愛液を滴らせる。そうして、匡哉様のベッドをまた少しだけ汚したのだった。

（本編へ続く）

サークル名：オンリーユー

著者：水瓶

読んでいただき、ありがとうございました！